

VEが当たり前に行われる 風土醸成をめざして

三菱電機株式会社 生産技術・ロジスティクス部長
一山 秀之



デジタル化の進展に伴い、事業活動によって生み出されるデータ量は増大を続けています。経済産業省2022年版「ものづくり白書」では、今後の企業は、業種を超えて各種データを集約し、AIなどの新しい技術を用いて設計開発、生産管理などを効率的に行い、付加価値を創出し、競争力を高めていくことが必要であると指摘しています。

つまり、より価値ある統合ソリューションを生み出すためには、変動の激しい市場環境に追随しながら、莫大なデータを活用し、企業体・内外の知見や技術を集結、創造力を発揮することにより、顧客が要求する真の機能を導き出さなければなりません。

これはまさしく、「使用者が必要とする機能を思考の原点とし、チームデザインで創造し価値を向上する」というVEの基本原則と同義です。VEを活用し、社会的課題を解決することは、今後もメーカーが担う使命ではないでしょうか。

■全関係部門が「自分ごと」とする VE風土の醸成

機能を思考の原点とし、価値向上を図るVEは、メーカーにとって空気のように必要不可欠な存在です。しかし、このVEが当たり前実践される風土を企業内で醸成・維持していくためには、現実には様々な困難と向き合わなくてはなりません。

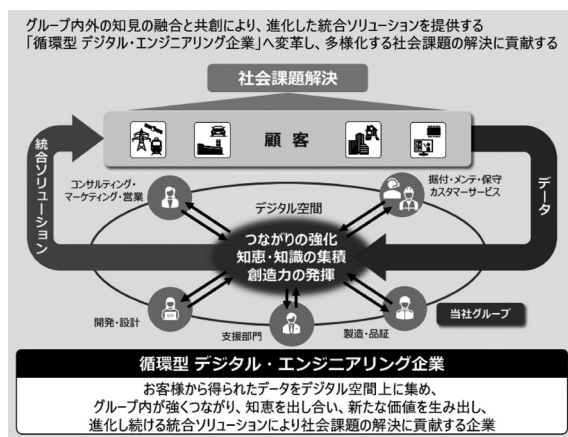
例えば、目標原価を達成するために、関係する全部門が製品企画段階から各方面で発生しうるリスクを抽出し、市場の変化に応じた対策を準備しておくことが必要となります。さらに、継続的に顧客価値を高める製品を企画・販売し、企業として適正な利益を確保し続けることも重要です。つまり、組織的なリスクマネジメントやチームデザインによる想像力の発揮は、製品の開発・設計者だけでなく、営業、製造・品証、保守サービス、各支援部門等、全

関係部門の知恵と知識を集結することで実現されます。そのためには、企業体の彼方此方で各個人が「自分ごと」としてVEを思考の原点に置き、各自の職務に取り込むことが重要と考えています。

■循環型 デジタル・エンジニアリング企業 への変革

三菱電機は2021年2月に100周年を迎え、次の100年を目指し、「活力とゆとりある社会」を実現するため、サステナビリティへの取り組みをより一層重視しています。多様化する社会課題の解決を果たすために、各事業のつながりを強固にし、グループ内外の共創により統合ソリューションを提供していく「循環型 デジタル・エンジニアリング企業」への変革を目指しています。そして、VEが当たり前に行われる風土醸成がこの変革の実現に貢献するものと捉え、活動強化を図っています。

当社に限らず、「事業を通じた社会課題解決」と「持続的成長を支える経営基盤強化」を同時に実現することは経営の根幹です。「VEが当たり前に行われる風土醸成」は、製品競争力の強化や企業体質の改善だけでなく、社会課題解決の実現につなげていくことができると考えています。



(筆者は当会理事)